

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏

名

魏 晨

論 文 題 目

「満洲」をめぐる児童文学と綴方活動
— 「満洲国」の次世代はいかに生み出されたのか—

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	日比 嘉高
委員	名古屋大学	教授	飯田 祐子
委員	名古屋大学	教授	池内 敏
委員	名古屋大学	准教授	坂部 晶子
委員	国際日本文化研究センター		
		教授	坪井秀人

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は「満洲」をめぐる児童文学と綴方を研究対象とし、資料を博捜しながら、作家と作品、関連雑誌、児童の綴方活動について考察を行ったものである。

第1部では、児童文学に関与した組織・人物・メディアについて分析を行った。第1章では「満洲」児童文学の展開を整理し、同地の児童文学が当初の作品輸入や作家の招聘活動から、在満児童に向けた現地作家による創作活動へと移行したと指摘した。発表媒体にも着目し、文学者が主宰する同人誌、教育機関や企業などの組織が作った機関誌、大衆メディアに児童文学が掲載された様子を整理した。第2章では、満鉄社員会機関誌『協和』における児童文化の様態を分析した上で、石森延男が同誌に発表した作品群を分析し、彼の創作意識の変化を見出した。また『協和』が創作初期の石森に活躍の舞台を提供し、彼が「満洲」の代表的な童話作家に成長する土台となったと指摘した。第3章では、満洲移住協会機関誌『拓け満蒙』を中心に「満洲」開拓移民の動員の様子と児童文学との関係について考察した。『拓け満蒙』の概況を把握した上で、満蒙開拓青少年義勇軍の募集とともに誌面に現れた小学生欄の登場と発展を追い、成人開拓文学と異なる特徴および機能を明らかにした。第4章では、日本生まれ、「満洲」育ちで、満鉄社員でもある童話作家・山田健二の作家人生を振り返り、彼の戦前の作品から在満日本人次世代の主体性を読み取った。その上で、こうした主体性を強調することは、山田のような「満洲」育ちの在満日本人による創作の重要な特徴だと論じた。第5章では、戦後において山田健二が戦前の作品を改稿し出版した点に着目し、80年代再版の際には、「満洲」の経験が祖国日本に帰るという枠組みに回収されていると指摘した。また日本に忠誠心を示す表現が残される一方で、軍にまつわる表現が削除されていることも示した。そして「満洲」からの引揚者が、戦後日本の思想的変化に応じて、自らの「満洲」経験を日本〈内地〉人の視点から語らざるを得ない状況となっていたと指摘した。

第2部では、児童が書いた綴方に注目し、日満綴方使節を中心に考察した。第6章では、日満綴方使節活動について調査し、国策会社・メディア・学校・教育者・文学者などそれぞれについて関連した役割を分析した。その上で、綴り方運動には「満洲国」の支配論理を再生産する役割が付与されていたと論じた。第7章では、日満綴方使節によって書かれた二冊の綴方集『綴方日本』と『綴方満洲』を取り上げて考察を行い、〈内地〉日本人と在満日本人の児童の認識の齟齬を見出し、「満洲」には同地を担う意識を持った次世代が育っていたことを論じた。第8章「川端康成と綴方——戦時中の帝国主義とつながる回路」では、「満洲」の綴方に携わり、日満綴方使節の文章に魅了された作家・川端康成と綴方との関係について考察を行い、戦時中、国策に関与した川端の様子を明らかにした。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

近年「満洲」に関わる研究は、引揚げや残留をめぐる領域で顕著な進展を見せているものの、それ以外の部分ではまだまだ不十分な部分が多い。今回本論文が取り組んだ児童文学と綴方についても、研究が手薄な状況にある。本論文は、石森延男と山田健二という二人の児童文学作家の活動、満鉄社員会機関誌『協和』や満洲移住協会機関誌『拓け満蒙』などといった関連メディア、児童を日満双方に派遣しあい綴り方を書かせた日満綴方使節の三つについて、新たな調査と考察を行い、成果を問うたものである。

本論文の評価に値する点は、大きく二点に集約できる。一点目は、「満洲」における児童文学の展開を、作家とメディア双方について目配りしながら整理した点である。石森についても山田についても先行する研究がないわけではないが、本論文が掲載雑誌の動向を踏まえながらより広範に作品分析に踏み込んだ点や、在満日本人の独自の意識に着目して考察した点は評価できる。なにより、山田を論じた章において同一作品の改作の様相や、評価されるポイントの変化を分析し、「満洲」をめぐる語りが敗戦をまたいで変化した様子を考察したことは、「満洲」の記憶がいかにして受け継がれたか、受け継がれなかったのかを論じることにつながり、他の引揚げ経験を持つ小説家や漫画家など創作者の活動にも通じる論点として委員の関心を集めた。戦前を主とした本研究が、戦後の問題を考える作業に直接的につながっていくことを示したもので、今後の研究の発展性をうかがわせた。

もう一点は、「満洲」における綴方に注目した点である。先行する研究の蓄積が乏しい中、資料を発掘し、日満綴方使節の全貌を明らかにした第二部は労作と評価できる。とくに、新しく発見した資料を用いることにより、日本側の児童の綴方作品と、「満洲」側児童の綴方作品とを対比することができるようになり、そこから両者の差異と特質を導き出すことに成功している点は注目すべき成果であろう。またこの研究が、戦時中の川端康成と綴方運動との接点に新たな光を当てることにつながっている点も評価できる。

ただし、本論文にも問題点がないわけではない。序章で提示した三つのキーワード「多元性」「辺境性」「連続性」は、説明不足であり十分には機能していなかった。より効果的な概念の整理をし、ビジョンを示すことが望ましいだろう。また、積極的に収集した資料は興味深く価値があったものの、分析がやや素朴かつ表面的であった点も残念だった。また、教育制度をはじめとした「満洲国」についての説明を増補し、本論文の外枠として示してほしいという委員からの指摘もあった。ただし、こうした課題は残ったものの、上述した本研究の達成が揺らぐものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。